

二〇一三年二月一九日(参加者一名)

窯出しの素焼の棚の春埃	せいじ
老幹のねじれ傾ぎて芽吹きけり	"
山麓の窯元訪へば雪しぐれ	"
コンクリの川床滑る春の水	"
雪化粧松子の書なる谷崎碑	"
松子書の谷崎の碑に風花す	うつぎ
石人の背ナ丸めたる余寒かな	"
春水の階なせる芦屋川	"
荒東風や治水の板碑そそり立ち	"
陶房に轆轤回して春を待つ	"
ろくろ引くをみな春愁なしといふ	菜々
下萌に立つ石人は四頭身	"
妹背なる石の羊へ春の雪	"
春雪のべールふはりと甲山	"
雪げむる指呼の六甲山うす化粧	はく子
と見る間に雪と変はりし車窓かな	"
高階へ吹き上りたる春の雪	"
春灯下陶器窯入れパズルめく	"

豪邸の閉ざす門より梅ふふむ	小袖
公家雛の稚児まんまるの立姿	"
陶房のぬくしろくろの軽やかに	"
ライト坂花の蕾のまだ固く	"
窯入れを待つ陶の棚春寒し	よう子
陶土練るブーツの女春灯	"
下萌に翁の句碑や暴れ川	"
雪しまく海の昏さを思ひけり	わかば
下萌の碑文が話題ぺちやくちやと	"
傘さして歩くに狭き梅の径	ひかり
雨の園訪ふは吾のみ梅三分	"
覗き見る我は映らぬ雑鏡	よし子
細雪碑に添ふ桜芽ぶきけり	満天
春灯に釉葉つける眼差しを	"
山々の墨絵となりて雪しまく	"

二〇一三年二月一九日(参加者一名)

定例会みひの選